

Title	際立ちゆく<琴の一族>:「蔵開」の巻より
Author(s)	芦田, 優希子
Citation	詞林. 1997, 21, p. 22-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67396
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 際立ちゆく〈琴の一族〉

### ― 「蔵開」の巻より―

# て侍りける

〈琴の一族〉の形成における「蔵開」の意義

る。

「うつほ物語」は、秘琴物語・貴宮求婚物語・立太子争いる。

ことから始まっている。に、仲忠が京極邸の蔵を開け、俊蔭の残した文書を発見するに、仲忠が京極邸の蔵を開け、俊蔭の残した文書を発見するため「蔵開」は、「俊蔭」の内容をもう一度引き寄せるため

つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書き渡りける日より、父の日記せし一つ、母が和歌ども一「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に上・四六七頁)清原家に代々伝わるものであったが、その文書は、「昔、累代の博士の家なりける」(蔵開・その文書は、「昔、累代の博士の家なりける」(蔵開・

を見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それて侍りけると、俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩

芦田

優希子

(蔵開・上・五二七~五二八頁)と中忠が言っているように、そこには「家の記・集のやうなと中忠へと伝えられてきた琴に秘められた一族の過去、すなわち俊蔭の苦難に満ちた漂流中の出来事や父母の悲しみななわち俊蔭の苦難に満ちた漂流中の出来事や父母の悲しみななわち俊蔭の苦難に満ちた漂流中の出来事や父母の悲しみななわち俊蔭の苦難に満ちた漂流中の出来事や父母の悲しみななわち俊蔭の苦難に満ちた漂流中の出来事や父母の悲しみななわち俊蔭の苦難に満ちた漂流中の出来事や父母の悲しみななかち俊蔭を始祖とした〈琴の一族〉を認識し、その三代目としての自覚を持ったのだった。(厳厲・上・五二七~五二八頁)と中忠が言っているように、そこには「家の記・集のやうなと神忠が言っているように、そこには「家の記・集のやうなと神忠が言っているように、

へと立場を変え、「楼の上」において〈琴の一族〉継承のた この時、〈琴の一族〉を確立した仲忠は、琴を伝授する側

ばならない。その始まりは「蔵開」にみることができる。で確立した〈琴の一族〉が独自性・優越性を保ち続けなけれ基盤だけでは秘琴伝授を行うに不十分である。さらに、ここめの秘琴伝授を行う基盤を築いたことになる。しかし、その

いる点を強調されている。すでに「俊蔭」において、「蔵開」で仲忠は、様々な人物との比較を通してすぐれて

なるべし」 (俊蔭・一八頁)本の国に契り結べる因縁あるによりて、その果報豊かし。その孫、人の腹に宿るまじき者なれど、この日の「…この山の族、七人にあたる人を、三代の孫に得べ

もなことだといえよう。族〉の中心に据えて「蔵開」を考察することは、至極もっと族〉の中心に据えて「蔵開」を考察することは、至極もっとしい人物だったのである。この点からも、仲忠を〈琴の一

と予言された仲忠は、「蔵開」で特別な役割を担うにふさわ

にして〈琴の一族〉が際立っていくかをみていきたい。族〉と、藤原氏・正頼一族・天皇家との関わりの中に、如何本稿では、「蔵開」における仲忠を中心とした〈琴の一

二、際立ちゆく〈琴の一族〉

#### (1) 清原氏と藤原氏

ひいている人物である。(仲忠は、俊蔭女より清原氏の血を、兼雅より藤原氏の血を

盤であり根幹であるということができる。けとなる「学問」を伝える清原氏の血は、〈琴の一族〉の基氏の血を自覚させるものであった。つまり、琴の伝承の裏付族〉にとって「学問」とは、俊蔭・俊蔭女・仲忠という清原 先に述べたように、清原氏は学問の家であり、〈琴の一

である。 である。 である。 しての仲忠ではなく、「藤原」仲忠が強調されてしまうのとしての仲忠ではなく、「藤原」、〈琴の一族〉の三代目一端に取り込んでしまう事態となり、〈琴の一族〉が藤原氏ものであった。しかし、それゆえに仲忠を藤原氏の政治力のものであった。しかし、それゆえに仲忠を藤原氏の政治力のし、、貴族社会の中心となって物語の表舞台に立つ力を与えるに、貴族社会の中心となって物語の表舞台に立つ力を与えるである。

かれようとしている。(そのため「蔵開」では、仲忠から藤原氏の影響力が取り除れる。)

て、その親を引き越してなされたるは、さるべきこととてあるおのれをこそなされましか。「大臣、関の侍らざらむには、いかでかもなきに」。「大臣、関の侍らざらむには、いかでからなきに」。「大臣、関の侍らざらむには、いかでからなきに」。「大臣、関の侍らざらむには、いかでからなど、「何しにかは参らむ。出でて歩けば、そこにおとど、「何しにかは参らむ。出でて歩けば、そこにおとど、「解目侍なるを、参らせ給はむとやする」。かくて、「除目侍なるを、参らせ給はむとやする」。

てし給びてむ。殊なることなくは、交じろひせじと かは。おのづから、右のおとど参り給ひて、心に任せ

まるのである。 原」仲忠、すなわち〈琴の一族〉としての仲忠が浮上し、強 で、仲忠自身の評価が高まることによって、もう一方の「清 につながり、仲忠の中の「藤原」仲忠は薄められる。その上 ているのである。このことは、藤原氏の影響力が弱まること かれている。政治権力の中枢にいる藤原兼雅の評価が下がっ 除目に不満を持ち、ろくに出仕もしていない父兼雅の姿が描 ここでは、中納言へと官位が上がり評価も高い仲忠に対し、 (蔵開・中・五六八頁)

から仲忠が外されることになる。今は詳細な考察は省くが、 る。ただ「国譲」「楼の上」になると、かえって琴の伝承者 たせる方法は、次の「国譲」の巻以降にもみることができ 「国譲」の立太子争いで、藤原氏の血を強めてしまった仲忠 このように藤原氏の権威を失墜させ、〈琴の一族〉を際立 ともかく、〈琴の一族〉を際立たせる方法は、「蔵開」以 〈琴の一族〉の純粋さを失ってしまうのだった。

(2)

一貫して働いているのは確かなことなのである。

次に藤原氏だけではなく他の一族の影響を考えるに

取り上げねばならない。なぜなら、「蔵開」では、女一宮と あたって、女一宮による天皇家の血と正頼一族の血の影響を の間に琴の後継者となる犬宮が誕生するからである。

仲忠は

わが世の限りは、かくて住み給へ。ほかへおはせむは、 わが子にあらず」と聞こえ給ひて、 らにほか住みせさせ奉り給はず、「大きなる家なり。 かくて、ここばくの男・女、男も、妻具し給へる、さ

(藤原の君・六九頁)

の場合と同様に、〈琴の一族〉との引き離しがいくつかみら 込まれてしまう。それを防ぐために、「蔵開」では、藤原氏 わされている。この状況のままでは、仲忠が正頼一族に取り という正頼の方針により、婿の一人として正頼の屋敷に住ま

を仲忠が講じる時である。 まず、もっとも顕著な例は、帝の御前で俊蔭の残した文書 れる。

まで来ば、そがためなり。その間、霊寄りて守らむ」 書には、「俊蔭、後侍らず。文書のことは、わづかな 霊添ひて守る」と申したり。俊蔭の朝臣の遺言、先の 臣のまうで来るまでは、異人見るべからず。その間 序に言ひて侍るやうにも、「唐の間の記は、俊蔭の朝 大将、「見給へしすなはち奏すべく侍るを、 る女子知るべきにあらず。二、 三代の間にも、 かの書の

つる一。(蔵期・上・五二八頁)となむ申して侍る。それに慎みて、今まで奏せで侍り

うに守られてきたものである。そのことを知る帝も、その文この文書は、傍線部のように、仲忠以外の手に渡らないよっる」。

祟りはなさじ。…」とのたまふ。(蔵開・上・五二八頁)・ 上、「朝臣の読みて聞かせむには、その霊ども、よも

書を仲忠に読ませるにあたって、

きける。 (蔵開・中・五三五頁)参らせ給はず。誦ぜさせ給ふばかりをぞ、わづかに聞・「人に聞かせじ」とて、高くも読まず、御前には人も

忠の講じる文書を聞くことができたのは、というように他人に聞かせようとはしない。この時ここで仲というように他人に聞かせようとはしない。この時ここで仲

琵、御前ごとにうち置きて、大将は書読み給ふ。・上の御前に琴の御琴、春宮の御前に箏の御琴、五の宮琵

せで聞いこうず。 (蔵開・中・五四一頁)

・四所さし向かひて、人に聞かせで聞こし召す。

ではないだろうか。れているが、そこにもう一つ意味を見いだすことができるのれているが、そこにもう一つ意味を見いだすことができるらは、天皇家の者だけが聞くことを許されているのだと考えらとあるように、帝と東宮と五の宮のみであった。一般にこれとあるように、帝と東宮と五の宮のみであった。一般にこれ

王だということである。(それは、東宮も五の宮も仁寿殿腹ではなく、后の宮腹の親

もみられる。

している。
さらに、后の宮もかすかながら、仲忠が講じる内容を耳にさらに、后の宮もかすかながら、仲忠が講じる内容を耳に

一かかることあり」とて、御簾のもとに后の宮おはせ

ど、いとよく聞こし召す。異人は、え聞き知らず。は、声にも読む。后の宮、いみじう憎み給ふ。されは、心せよ」とのたまへば、少し高く読む。所々な、ただ、言ふに従ひて読め。これは、誰も誰も読みる。上、「いと悪き朝臣なりけり。かくな臆せられる。上、「いと悪き朝臣なりけり。かくな臆せられる。后の宮、「内裏こそ、聞かせ給はざらめ。講師ば、上は、大将に御目くはせて、みそかに読ませ給ば、上は、大将に御目くはせて、みそかに読ませ給

 〈琴の一族〉と正頼一族との距離を保つための対比は他に 「大の存在を許さないことで、正頼一族に取り込まれないの皇子達も全く登場しない。今までほとんど登場しなかった の皇子達も全く登場しない。今までほとんど登場しなかった の皇子達も全く登場しない。今までほとんど登場しなかった の皇子達も全く登場しない。今までほとんど登場しなかった 原当に考えれば、その場にいるのは帝の寵愛が一番深い仁 原当に考えれば、その場にいるのは帝の寵愛が一番深い仁 「蔵開・中・五四八頁」

正頼は大将を退くにあたって、

と仲忠に大将職をゆずる。そこに隠された意味付けとして齊 らせてを ぞあらむ。【その所、権中納言の朝臣にもがな】と思 「…この職は、とどめられば、論なう、このわたりに (蔵開・上・五二四頁)

ふを、その心を思ひて、かの朝臣に譲りげなる気色取

頼から仲忠に政治的権力が移譲されると述べられている。確 をあげ、〈藤原氏的性格〉という共通項を架け橋として、正 藤正志氏は、正頼と仲忠の持つ〈姓の両義性〉という共通性

な同じ造型が成されながらも、娘たちを嫁がせることで婿た 宮を得るという点においても同じである。しかし、そのよう 持つという共通点は存在する。さらに二人とも時の帝の女一 性格を持ち、仲忠は清原氏と藤原氏という二つの意味合いを かに、正頼は一世の源氏でありながら同時に藤原氏としての

ちを取り込むというヨコのつながりで権力を保つ正頼と、あ している一族のあり方が異なっている。だからこそ、〈琴の くまでも〈琴の一族〉を確立しようとする仲忠とでは、めざ 一族〉と正頼一族の違いがいっそう強調されているといえよ

とは対照的に、正頼一族の親と子のなげきが描かれている。 また「蔵開」では、親と子の関係を重んじる〈琴の一族〉

①「…『心地も痴れぬべきものなめり』となむ嘆か

(蔵開・下・六〇〇頁)

また犬宮の母として藤壺にまさるとも劣らない女性として描

③「…『宮仕へに』とて出だし立てたれど、思ふやうに ②「…里にありし昔のみ恋しくて、『あらじものを。何 憂く悲しきことも多くなむ」。 (蔵開・上・五一二頁) せむに、かく出だし立てられてあらむ」と思へば、心

く」と聞き侍るは、いとうたてくなむ。…」。 さず、心憂きことどもの多かんなれば、常に思ひ嘆 もあらず。『「後ろやすく」と頼み聞こえし人さへ許

④おとど、爪弾きをして、「女子を持ちたらむ人は、よ き犬・乞丐なりけり。中に、『らうたし』と思ひし者 (蔵開・上・五二一頁)

①は子に対する正頼の親としてのなげき、②は東宮の偏愛を ひ、立ち給ひつるを、 犬・烏にも呉れて、籠め据ゑたらましものを」と言 をしも出だし立てて、かかる耳を聞くこと。なほ (蔵開・下・五九三頁)

うな藤壺のなげきは、東宮との仲がかんばしくないことを示 して、比較の対象にされることが多い。女一宮は、藤壺が讃 うように、いくつも見られるのである。その中でも、②のよ うけ、宮仕えの気苦労を背負った藤壺のなげき、そして③④ ることはなかったが、この「蔵開」では、仲忠の妻として、 えられるばかりであった貴宮求婚譚では、ほとんど述べられ しており、仲忠と女一宮とが円満であることを強めるものと は入内させたことを後悔する正頼と妻の大宮のなげき、とい

かれている。例えば、

来し夜までは。見奉りしかば、忘れ侍りにき。今、はし。初めは、いとこそわびしかりしか。ここにまうでうれしくおぼえ給へ。異人は、かく思ひ消たせざらままし。その御心を失はせ給へるこそ、あが君は、いとす…ここに候はざらましかば、かく思ひ給へてぞ侍ら

あったからこそだといわれている。また、藤壺が、と、仲忠が藤壺を忘れることができたのは女一宮の存在がと、仲忠が藤壺を忘れることができたのは女一宮の存在が…」

た、いぬなど侍れば。『さ思ひ侍りけむ』とこそ。

不幸はさらに女一宮を高めることにつながっている。「楼のと、仲忠と結婚した女一宮をうらやましく思うなど、藤壺のき給ひて、一所、心安く。…」 (蔵閉・上・五二二頁)「なかなか、いとよしや。よに心憎く思ひたる人につ

の優越を示すために必要なことなのである。藤壺を得られなかった以上、仲忠の、ひいては〈琴の一族〉開」で彼女の評価を高めることは、藤壺の求婚争いで仲忠が上」の琴の伝授では疎外される女一宮ではあるが、この「蔵

であり、同じく入内した立場にある仁寿殿がいる。 また、藤壺と同様に、幸福とはいえない女性に、藤壺の姉

され奉りたり。娘は、かく世に類なき人に、二つなくへは、同じき帝と聞こゆれど、上に、限りなく時めか「仁寿殿の女御の、思ふやうにめでたき人なり。宮仕めり、同じく入内した立場にある仁寿殿がいる。

に、かたちよく、人に褒められつつ、あまた持たり。ただ、「后に据ゑ、坊に据ゑず」と言ふばかりにいっただ、「后に据ゑ、坊に据ゑず」と言ふばかりにいっただ、「后に据ゑ、坊に据ゑず」と言ふばかりにいっただ、「后に据ゑ、坊に据ゑず」と言ふばかりにいっただ、「后に据ゑ、坊に据ゑず」と言ふばかりにいるない。のでたし。男皇子たちは、いとうつくし思はせたり。めでたし。男皇子たちは、いとうつくし思はせたり。めでたし。男皇子たちは、いとうつくし

福な女性とはいえない造型が成されている。も后に立つことはできなかった女性として、どちらも真に幸ものの自分の生んだ皇子を東宮に立てることは叶わず、自らちた宮廷生活を送っているし、仁寿殿は朱雀院とは睦まじいの皇子を持ちながら、周囲からねたまれるなど、なげきに満とあるように、二人とも時めいてはいるが、藤壺は東宮候補とあるように、二人とも時めいてはいるが、藤壺は東宮候補

えることは可能であろう。
れも〈琴の一族〉と正頼一族との距離を隔てるものとして考藤壺も仁寿殿もどちらも正頼一族の女性であることから、ことして後に入内するであろう犬宮の姿である。犬宮に対し、時、これらの比較対象として思い浮かぶのが、〈琴の一族〉時、これらの比較対象として思い浮かぶのが、〈琴の一族〉

め、「蔵開」において天皇家そのものとも少し距離をおこう 東宮が疎外される要因を、正頼一族にではなく天皇家に ないように、東宮の評価は低く、その一方で、仲忠はすぐれないように、東宮の評価は低く、その一方で、仲忠はすぐれた人物として雄かれている。このように比較される理由とした人物として疎外するためと考えられる。しかし、ここでは、 
開」において、「見給ふ人は、殊にはなやかにも見え給は 
開」において、「見給ふ人は、殊にはなやかにも見え給は 
開」において、「見給ふ人は、殊にはなやかにも見え給は 
開」において天皇家の人物は東宮である。「蔵 
において天皇家の人物は東宮である。「蔵 
知として疎外するためと考えられる。

とする〈琴の一族〉の姿をみてみることにしたい。

仲忠が帝の御前で俊蔭の残した文書を講じる場面で、共に

残りの三人が唱和して「おもしろき句あるところ」を誦じて

離をおいて際立とうとする〈琴の一族〉の立場から考える宮の姿として、考えることもできる。しかし、天皇家から距(このことを藤壺のことを考えるあまり、集中力を欠いた東いるのに、東宮は誦じていないのである。

一族〉の血を受け継ぐ、真にすぐれた帝王を登場させるためといえよう。純粋な〈琴の一族〉と〈学問〉を得るに値しない合体するにふさわしい人物が得られると思われるのである。といえよう。純粋な〈琴の一族〉と〈学問〉を得るに値しないといえよう。純粋な〈琴の一族〉と〈学問〉を得るに値しないといえよう。純粋な〈琴の一族〉と〈学問〉を得るに値しないということを表現まだ〈琴の一族〉は天皇家とは合体しないということを表現まだ〈琴の一族〉は天皇家とは合体しないということを表現と、東宮の評価が下がることは、この東宮が即位した時にもと、東宮の評価が下がることは、この東宮が即位した時にも

れている。時に、〈琴の一族〉と近づきすぎることのないように造型さ時に、〈琴の一族〉と近づきすぎることのないように造型さまた、五の宮も、東宮と同様、聞く権利を与えられると同

の布石ということができよう。

給ひてなりけり」。大将、「「世の中のあだ人」となどのたまひしを、この頃、音もし給はぬは、かう聞きらにてあり」とにやあらむ、「我はしも、憎まじ」な「五の宮の御心ぞ、いとあやしきや。『かく、いたづ大将、「一夜、五の宮の奏し給ひしをなむ」。君、大将、「一夜、五の宮の奏し給ひしをなむ」。君、

のたまへば、 (蔵開・中・五五一~五五二頁)も、慎むことなく、よろづのことを奏し給ふや…」とむ騒がれ給ひて、世をばないがしろに思ひて、御前に

族〉である仲忠に匹敵する人物として描かれることは決してる。文書を聞くことのできた特別性は打ち消され、〈琴の一暴露した(蔵開・中・五三九頁)ために、評価を落としているのように、「蔵開」での五の宮は、文書が講じられる場にのように、「蔵開」での五の宮は、文書が講じられる場にのように、「蔵開」での五の宮は、文書が講じられる場に

うな天皇家の血をひき、また仲忠と同じくすぐれた琴の名手院の皇子であり朱雀院の異母弟にあたる人物である。そのよりも含めることができる。涼は臣籍におりてはいるが、嵯峨さらに天皇家と仲忠の対比として、もう一人源涼との関わ

たり」と言ひしかど、今は、いとこよなし。さらに難なき、帝の御婿なり。「源中納言、なずらひ

である涼よりも、仲忠が、

いっそう際立つのである。と、すぐれた人物として描かれることで、〈琴の一族〉はと、すぐれた人物として描かれることで、〈琴の一族〉は

三、〈琴の一族〉のあるべき姿へ

今まで述べてきたように、「蔵開」では、〈琴の一族〉が、際

を避ける意味合いがあるということができよう。このようにと、仲忠が立太子争いに消極的である理由の一つとして、梨はさらにそれが押し進められ、「蔵開」で確立する〈琴の一族〉が、他に取り込まれることを防ぐ姿勢は、あくまでもがればいいというわけではない。「蔵開」で確立する〈琴のがればいいというわけではない。「蔵開」で確立する〈琴のがればいいというわけではない。「蔵開」で確立する〈琴のがればいいというわけではない。「蔵開」で確立する〈琴のがればいいとがうだが、単に〈琴の一族〉が他から浮かび上めに必要なことだと考えられるのである。今回は「国譲」で性・優越性を保っていることがみてとれる。次の「国譲」で性・優越性を保っていることがみてとれる。次の「国譲」ですがればいいというわけではない。「蔵開」と同様に考えると、仲忠が立太子争いに消極的である理由の一つとして、梨を避ける意味をおき、中忠が表し、大宮を表して外戚に立つことで藤原氏・正頼一族・天皇家から距離をおき、独自立つことで藤原氏・正頼一族・天皇家から距離をおき、独自

れる犬宮入内へ向けて、独自性を守ることで〈琴の一族〉が点であり、その上で「楼の上」での秘琴伝授やその後予想さ「蔵開」は、物語において新たな行く末を暗示させる出発起こっているのだといえる。

際立つという最初の一歩をふみだした巻なのである。

#### 注

立太子争い物語)と把握する見方に立ち、秘琴物語を「俊蔭」(1)『うつほ物語』を俊蔭系(秘琴物語)、正頼系(貴宮求婚物語・

「蔵開」以後、すべての事柄は、「蔵開」で成立した〈琴の

上」「楼の上・下」、貴宮求婚物語を「藤原の君」「忠こそ」 「春日詣(桂のみ)」「内侍のかみ」「蔵開・上」「楼の上・ 「春日詣」「嵯峨の院」「祭の使」「吹上・上」「吹上・下」

中」「蔵開・下」「国譲・上」「国譲・中」「国譲・下」とみ 「菊の宴」「あて宮」「沖つ白波」、立太子争い物語を「蔵開・

- (2)巻名および引用本文は、室城秀之氏校注【うつほ物語全】
- (3)伊井春樹氏「俊蔭の家集と日記類―『うつほ物語』蔵開巻の (おうふう・平成七年十月) による。
- 4』和泉書院・平成七年四月)には、仲忠が受け継いだ文書につ いての詳しい検討がある。 意義―」(『中古文学の形成と展開 王朝文学前後 継承と展開
- (4)三田村雅子氏「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉―繰り返しの とによって、琴の意味性は維持されたのである。」とある。 には、「琴の音にこもる一族の執念を書かれた物があとづけるこ 方法をめぐって―」(『東横国文学』十五・昭和五十八年三月)
- (5) この点については、西本香子氏「『宇津保物語』の藤氏排斥」 (『明治大学大学院紀要』第二十九集・平成四年二月) に、「藤
- (6)前掲論文(4)では、天皇を琴のこよなき理解者と位置づけ 氏排斥」という言葉で詳しく説明されている。
- (7)ただし、后の宮が兼雅の妹であり、次の「国譲」の立太子争い では藤原氏そのものを体現する存在であることから、先に述べた になるのは、仲忠と兼雅の関係であって、后の宮はいまだ問題で はないかと思われるかもしれない。しかし、后の宮が藤原氏とし て疎外されるのは次の「国譲」からであり、この「蔵開」で問題 〈琴の一族〉から藤原氏を引き離そうとする試みに合わないので

ることができよう。 聞くことを許されていないところに、藤原氏を疎外する意識を見 た帝が仲忠に文書を「みそかに」読ませ、后の宮が共にはっきり 中では、后の宮は一人疎外されている。后の宮がいることを知っ はない。さらに、文書が講じられるのを聞くことができた人物の

- (8)齋藤正志氏「藤原仲忠の人物造形―人秘琴>〈漢学>〈官職・御帯〉」
- (『二松』三・平成元年三月)。
- (9)室城秀之氏「あて宮東宮入内決定の論理」(「うつほ物語の表現 譚を政治的な〈横の系図の論理〉によって王権獲得をめざす と論理』若草書房・平成八年十二月)には、「物語はあて宮求婚 〈家〉の物語として展開させてゆく」とある。
- (□)竹原崇雄氏「宇津保物語「蔵開」の構造」(『文学』第五十二 巻第四号・昭和五十九年四月)には、「仲忠と女一の宮、東宮と
- の主題展開の方法の一つ」とある。 貴宮という二組の夫婦の関係のあり方を描きつつ、仲忠の幸せ、 貴宮の不幸せな境遇を対比的に描き出そうとするのが、「蔵開.

(Ⅱ) 前掲論文(5)では、犬宮入内についてふれられている。

(あしだ・ゆきこ 本学大学院博士前期課程)